２０２２年１０月１６日（日）聖霊降臨後第１９主日
銀座教会　主日第二礼拝

礼拝招詞　「御前には栄光と輝きがあり　聖所には力と光輝がある。
諸国の民よ、こぞって主に帰せよ　栄光と力を主に帰せよ。」詩編９６：6-7

主の祈り

交読詩編　詩編９６編１１～１３節

天よ、喜び祝え、
地よ、喜び躍れ
海とそこに満ちるものよ、とどろけ
野とそこにあるすべてのものよ、喜び勇め
森の木々よ、共に喜び歌え
主を迎えて。
主は来られる、地を裁くために来られる。
主は世界を正しく裁き
真実をもって諸国の民を裁かれる。

使徒信条

讃美歌　１番　神のちからを　とこよにたたえん

聖　書

マタイによる福音書２３章３７～３９節

37「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった。38 見よ、お前たちの家は見捨てられて荒れ果てる。39 言っておくが、お前たちは、『主の名によって来られる方に、祝福があるように』と言うときまで、今から後、決してわたしを見ることがない。」

牧会祈祷　天の父なる神さま。今朝もあなたの御前に立たせていただき、礼拝をささげる幸いを感謝いたします。主にある兄弟姉妹と共に礼拝をささげます。この時、世界の教会に集う者があなたの御名を讃美している交わりを覚えます。国境を越えて民族の違いも越えて、主に贖われ、救われた喜びをもって御名をほめたたえます。

本日は信徒伝道週間の主日礼拝です。主日礼拝と共に、今週の正午礼拝の奉仕者が立てられています。一人一人の奉仕者の働きを主が顧みてくださいますように祈ります。共に御言葉を聞きつつ、あなたの栄光のみを現すものとしてください。キリストの御名によって祈ります。　アーメン

説 教　「主の嘆きと救いの確信」　　牧師　髙橋　潤

信徒伝道週間の主日第二礼拝を迎えました。銀座教会では、この主日朝夕の礼拝は、近隣の信徒の方を特別講師としてお迎えし、奨励をお願いしてきました。しかしコロナ禍の数年は、近隣の教会からではなく、銀座教会の教会員から奨励者を立て、礼拝をささげています。本日の朝夕、今週の正午礼拝はすべて信徒の方々が奉仕します。

本日与えられた聖書箇所は、正午礼拝で読み進めているマタイによる福音書から選びました。マタイによる福音書２３章は、８つの不幸が記されています。マタイによる福音書５章には主イエスが群衆に語った８つの幸いが記されています。５章に対応して２３章には主イエスが律法学者に語った８つの不幸が記されているのです。

この不幸については「律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ」という言い方ではじまります。２１章において、主イエスはエルサレムに入られました。群衆は皆、子ロバに乗ってエルサレムに入城される主イエスを喜んで迎えました。群衆は**「イエスの前を行く者も後に従う者も叫んだ。「ダビデの子にホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。いと高きところにホサナ。」」**主イエスの前と後ろにオリンピックの入場行進のように喜んで「主の名によって来られる方に、祝福があるように」と叫んだのです。この言葉が本日の御言葉において思い起こされています。その中間において群衆の叫び声は、主イエスを十字架に付けろという叫び声に変わってしまったようにおもわれました。しかし十字架の主イエスの御前で、「主の名によって来られる方に、祝福があるように」という声は空しい言葉となったのではなく、将来、そう言うときが来ると希望が語れているのです。

エルサレムに入城された主イエスは、神殿に入り、神殿の境内で商売をしていた人々を皆追い出しました。その後、ファリサイ派の人々が何度も主イエスを試し陥れようとしましたが、主イエスを貶（おとし）めることはできませんでした。

そして、今度は、主イエスの方からの反論のようにして８つの不幸が語られました。主イエスはエルサレム神殿の責任者、指導者に対して、名指しで「不幸だ」と８回も語っています。（新共同訳聖書では２３章１３、１５、１６、２３，２５，２７，２９節の７つの不幸とマタイによる福音書２８章の最後の所に「底本に節が欠けている箇所の異本による訳文」の最後に２３章１４節が記されていて、聖書本文から外れているところのもう一つの不幸を合わせて８つの不幸になります。）

この８つの不幸の内容は、第１「人々の前で天の国を閉ざすからだ」、第２「改宗者ができると、悪い子にしてしまう」、第３「やもめの家を食い物にしている」、第４は「神殿の祈り、誓い」について、第５は神殿において「正義、慈悲、誠実がないがしろにされている」、第６は外側はきれいにするが内側は強欲と放縦に満ちている、第７は内側は偽善と不法で満ちている、第８は預言者の墓を建てたり記念碑を飾ったりしているがそれは預言者たちを殺した者の子孫であること自ら証明していると、大変厳しい指摘によって、主イエスによる８つの不幸が数え上げられています。

その上で、本日の聖書箇所、「エルサレム、エルサレム」と主イエスの嘆きが記されているのです。主イエスは、律法学者やファリサイ派の人々に対する大変厳しい批

判をしていますが、実は同時に神の愛を伝えていることを見落としてはなりません。単なる嘆きではなく、神の愛に裏打ちされた嘆きであるということです。

律法学者やファリサイ派といえば、主イエスの時代、ユダヤ人社会では圧倒的な権威と力を持っている人々でした。対して主イエスはユダヤの社会の中では、12人の弟子たちとともにガリラヤから来た、全く無名の人でした。学者でもなければラビでもないし教師とも呼ばれていないのです。しかし、律法学者たちより律法を知っているし、神殿のあるべき姿を正しく指摘し、愛の業を行ってエルサレムに近づいてきたのです。そして律法学者たちの偽善について厳しい指摘をしているのです。当時の社会の権威に正面から立ち向かう主イエスが、彼らを厳しく批判するとき、誰よりも正しく神の御心を伝えているのです。

主イエスは厳しい批判と共に神の愛をこのように伝えています。**「めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。」**父なる神は、親鳥が雛を抱きかかえて育てるように、偽善者たちを暖め、守り、養おうと何度も集めようとされるお方であると語られているのです。主イエスは、律法学者に対して、神は「預言者を殺し」た者を神御自身の羽の下に何度も集めようとしていたと語ります。神御自身を迫害する者を神は何度も御自分のふところに集めようとされたのだと語ります。それが神の御心であると教えているのです。神は繰り返し、赦しの交わりへ迎えようとされたことを思い起こさせています。同時に、こうした神の愛の招きに応じなかった歴史を思い起こさせているのです。**「だが、お前たちは応じようとしなかった。38 見よ、お前たちの家は見捨てられて荒れ果てる。」**

神の招きを無駄にしたことだけが思い起こされているだけではありません。預言者を殺し、神の招きを無視した偽善者に対して、今も尚、神に立ち帰る希望をもって、偽善者たちを見つめているのです。それが次の言葉で分かります。

「言っておくが、お前たちは、『主の名によって来られる方に、祝福があるように』と言うときまで、今から後、決してわたしを見ることがない。」

「と言うときまで」と記されていることに注目しましょう。神の審きを受けるのですが、最終審判として、主イエスは救いの日が用意されていることを望み見ているのです。だから、**『主の名によって来られる方に、祝福があるように』と祈るときが来る、**とお語りになり、エルサレム入城の時の言葉をここにおいてもくり返して、神の救いの道を指し示しているのです。

主なる神は、最初の救いへの招きに応えられなかった偽善者、預言者たちを迫害した者であっても、神に立ち帰り、祈るときが来ることを確信しているのです。

主イエス・キリストは、８つの不幸を語り、お前たちは見捨てられて荒れ果てると語られるときにも、神の救いの可能性を失っていないのです。主イエスの審きの言葉は最後通告ではなく、神の救いの可能性が残っていることを同時に伝えているのです。

使徒パウロは、キリストに出会う前、キリスト者迫害の先頭に立っていました。当時のキリスト者から見たらば、この世の中で救われない人の先頭にいるように見えたことでしょう。しかし、使徒パウロは、目が見えなくなりキリストの声を聞きました。

そして召命を与えられ、キリスト者を迫害する者からキリストを宣べ伝える伝道者へ変えられました。使徒言行録に記されているように使徒パウロはエルサレム教会とアンテオケ教会の橋渡しとなって、異邦人伝道にまい進しました。生涯福音伝道に喜びを見いだし、何度この世の鎖に縛られても神の自由の中で福音を伝え続けました。

私たちの目には、あの人は絶対に救われないといいたくなるような人がいることと思います。しかし、その人と私たちとでは神さまから見たならば、５０歩１００歩、大して違わないかもしれません。神さまの御心は、パウロに対しても私たちに対しても、審きと同時に救いの可能性を残して下さっているのです。迫害者の筆頭であったパウロが、大きく変えられ、命をかけて生涯福音を伝道する者に変えられました。まさに主イエスの言葉で言うならば、「偽善者」であり「預言者を殺すもの」でした。しかし、そのような土の器を主なる神は変えて下さるのです。神の愛によって愛され、聖霊なる神の執り成しによって神の救いの可能性は最後までのこる神の力なのです。

審きを語る厳しい主イエスは、裁かれるべき私たちが、いつの日か「**『主の名によって来られる方に、祝福があるように』と祈るときが来る**」とお語りになりました。この御言葉は、エルサレムに入城された主イエスを群衆がホサナホサナと賛美して迎えた時の言葉でした。その言葉をもって再臨の主イエスを迎える日が来ると語られているのです。エルサレム入城の時の賛美は十字架の出来事によってかき消されてしまったかと思われました。しかし、主イエスを十字架につけろと叫んだ者が再び「主の名によって来られる方に、祝福があるように」と祈るときが来ると語られているのです。十字架の後、復活して昇天された主イエスが再びこの地上に来られる、再臨の主イエスと出会うことを祈って待つ姿勢です。私たちがそのように造りかえられる日を迎えることを確信し待ち望んでおられるのが神の御心なのです。

私たちの信仰生活のあるべき姿がここに描かれています。私たちに与えられた十字架と復活の主イエスを救い主と信じる者の信仰生活の姿勢は、この地上の様がたとえ戦場であっても、再臨のキリストを待つ姿勢を崩してはなりません。重い病にかかろうとも、再臨のキリストを待つ姿勢を整えて、主を仰ぎ祈り続けるのです。再臨のキリストを待ち望む信仰を与えられ、赦されて、「主の名によって来られる方に祝福があるように」と一緒に祈る時が与えられることを確信して歩みましょう。

祈りましょう。　天の父なる神さま。主イエスをホサナと迎えた舌で主を十字架につけろと叫ぶ私たちに、厳しい審きの言葉をお与えくださったことを感謝いたします。主の審きの向こうに、私たちの舌を清め主の御名を祈り求める信仰をお与えください。キリストの御名によって祈ります。　アーメン

讃美歌　３６３番　わがたま覚めて　せつにいのれ
献　金
頌　栄　５４４番
祝　祷